みんなの広場

ところざわの文化財 ❺ 歴史再発見

江戸時代の新田開発と三富新田

江戸時代以前の所沢市域の村は、丘陵の谷あいや川の流域に立地していました。豊富な湧き水が集まるこのような地形には、容易に水田をつくることができ、農業生産が安定した場所だったのです。一方で、武蔵野台地に代表されるように市域の大部分を占めている台地には、ススキや菅野（かやの）などの原野が広がっていました。

徳川家康によって開かれた江戸幕府は、年貢を増やすためこのような原野を開墾し、積極的な新田開発を推し進めました。中でも川越藩主の柳沢吉保によって開発された市域北部の中富・下富と三芳町上富地区の「三富新田」は、今でもその美しい景観をとどめています。

元禄７年（1694）徳川第５代将軍綱吉の側用人（そばようにん）だった吉保は、川越城主となり、新田開発に着手しました。まず幅６間（約10.8m）の道路を東西に作り、その道路に面して間口40間（約72m）、奥行375間（約675m）の区画を農家１戸分として短冊状に区切りました。そして道路に面した表口を屋敷地として、その後方に畑を、さらにその後方に山林を配置し、ここから燃料となる薪（まき）や肥料用の落葉や下草を確保させました。

しかし、入植した人々にとって新しい村での生活は苦労が多かったようです。特にこの一帯は水が不便な土地で、風呂に入るかわりに、陰干しした茅（ちがや）を束ねたもので体をこすり、土を落としたと言われています。吉保は、心の支えとして上富に多福寺、中富に毘沙門社（多聞院）を創建しました。

三富開拓地割遺跡

このように村の人々の努力によって、村ができてから120年ほどで、上富村110戸、中富村70戸、下富村78戸と家の数が増えていきました。300年以上が経過した現在も開拓者精神は引き継がれ、整然と区切られた地割の広がる新田風景が、その姿を醸し出しているのです。

レッツボランティア

【所沢朗読ボランティアグループなかま】
～目の不自由な方のために書かれた文字を音に変える活動～

「所沢朗読ボランティアグループなかま」は、所沢市で初めて開催された朗読ボランティア講習会の修了生が昭和55年に立ち上げました。視覚障害で文字を読むことが不自由な方のために、「書かれた文字を音に変える」音訳を通じて、情報提供のサポートをしています。

旧市庁舎を拠点とし、対面朗読や朗読テープ（個人から依頼された本などを朗読したもの）の制作と貸し出しなどに取り組んでいます。また、朗読テープの利用者とボランティアとの交流会も年に一度開催し、そこで得られた利用者の声やニーズを活動に活かしています。そして、朗読ボランティアのスキルアップのための勉強会も欠かせません。朗読のみならず、アクセントや読み仮名の確認などの事前の調査、録音器材の管理や発送作業など、活動の内容は多岐にわたります。

「声を出して読むことは、脳を活性化させるのによいそうです。人の役に立ち、自分のためにもなります。一緒に活動しませんか？」と、メッセージもいただいています。なお所沢には、「音訳ボランティアグループそよかぜ」というグループもあります。

朗読テープの作成

今回ご紹介したグループについて、またその他ボランティア活動に関心のある方は、社会福祉協議会までお問い合わせください。

問い合わせ　所沢市社会福祉協議会（☎2925-0041・FAX2925-0040）

街の写真館

▶環境を学び、夏休みの自由研究にもなるのかな。「リサイクルふれあい館の環境学習」親子で流木アート教室」。（撮影／市民カメラマン・中村（仁））
7月30日㈰／リサイクルふれあい館

◀ドイツの青年のグループが、所沢を訪問。剣道や弓道も体験した「日独スポーツ少年団交流事業」。
7月23日㈰／市民武道館

▲夏の風物詩のひとつが、盆踊りや夏まつり。子どもからお年寄りまで、地域のみんなで輪をつくりました「宮本町盆踊り大会」。
7月29日㈯／神明社（宮本町）

一口メモ 防犯

～侵入盗（しんにゅうとう）（空き巣・忍び込みなど）に注意しましょう～

窓ガラスを破られたり、カギのかかっていない窓などから侵入されたりする被害が多く、特殊な道具でカギを開けてしまうピッキングによる被害も増えています。

また、被害直後に、犯人と思われる者が警察官や銀行員を名乗り、被害者の家に電話をかけてきて、盗んだカードの暗証番号を聞き出し、現金を引き出したという事件もあります。十分に注意してください。

★★被害を防ぐためには★★

①短時間の外出でも必ずカギをかけましょう
②補助錠の取り付けや、窓ガラスには防犯フィルムなどを貼（は）り付けましょう
③ピッキングで開けられにくいカギに交換しましょう
④長期間外出するときは、近所に声をかけましょう

問い合わせ　防犯対策室（☎2998-9090・FAX2996-0015）

はつらつ野老（ところ）っ子

国際大会で学んだチームワーク

常岡　正輝さん（東所沢在住）

「プロ野球選手になりたい！」と力強く将来の夢を語ってくれた常岡さんは、小学３年生のとき友人に誘われて少年野球を始め、現在は所沢中央リトルシニアに所属している柳瀬中学校の３年生です。

この夏、アメリカのイリノイ州クリスタルレイクで開催された、『2006年CABAワールドシリーズ大会（全米選手権大会）』に日本代表チームの一員として選抜されました。

大会で活躍する常岡さん

この大会は、カナダやメキシコなど数か国の選抜チームをはじめ、アメリカ国内の各州代表チームが参加する大会です。初めて国際大会に参加した常岡さんは、試合で13打数７安打（２塁打１本、３塁打２本）という成績を残しました。大会を振り返り「とても有意義な経験ができた」と興奮気味に話してくれました。

２年前に常岡さんは、リトルシニアのコーチの薦めもあり、ピッチャーからキャッチャーに転向。その後、チームでは４番打者として活躍しています。「野球がうまくなりたいという気持ちはますます強くなってきました」と今でも前向きな姿勢は変わりません。

常岡さんに野球の魅力はと尋ねると「ホームランを打ったとき」そして試合に勝つために重要なことはと尋ねると「チームワーク」と答えてくれました。スピードとパワーに勝る外国人選手と対戦した常岡さんは、この大会でチームワークの大切さをあらためて感じたと言います。「ピンチやチャンスのとき、チームがひとつにまとまって、チームのために戦えるところが日本らしい野球だと思う」と話してくれました。

また、常岡さんはこのアメリカ遠征で、英語もしっかり勉強したいという目標も見つけ、中学生らしい一面も見せてくれました。

全国約２万人から選ばれたチームの仲間からも多くの刺激を受け、「野球で学ぶことは、すべて僕の人生にプラスになります」と目を輝かせていました。信頼される選手になるため、一層自分自身に磨きをかける常岡さん。これからもチームワークを大切に、夢を白球に込めて、はつらつとしたプレーをしてくれることでしょう。

誰でもエッセイ

テーマ　双子

孫にきれいな地球を

中新井・高橋　祥子

娘夫婦に双子の男の子が生まれました。両家ともども双子が生まれたのは、初めてのことです。

生まれてすぐに、個性があるのには驚いています。兄の方は神経質でミルクの飲みも細く、弟はおおらかでぐいぐいミルクを飲みます。

あっという間に差がつき、やることなすこと弟の方が速い。弟は次々と新しいものに興味を持ち、なんでも口に運ぶ。

そして兄の方は、よく観察し自分が納得いくまで同じ動作を繰り返す。

娘は、自分のことどころではなく、２人の子どもに振り回されています。日ごとに成長する孫たちに癒（いや）されています。

この可愛い孫たちのために、きれいな地球をどうすれば残せるのか、私達の課題でもあります。

双子のトマト

上新井・岡田　佳彦

農家であるわが家では、いろいろな野菜を作っている。

もうずいぶん前のことだが、自然のいたずらで、トマトが２つくっついてできたことがあった。まだ小学生だった息子は、それを見ると「ふたごのトマトだ！」とひとりで興奮していた。よっぽどめずらしかったのか、それを学校に持って行き、先生や友達にも見せていた。

そんな息子夫婦に、双子の女の子が誕生した。私にとって初孫である。

先日、『ふたごのトマト事件』のことを息子に話してみると、「そんなことあった？」とまるで覚えていない様子であった。

現在は、畑も小さくなり、家族で食べる分の野菜しか作っていないが、早く孫たちに、手作りの野菜をたくさん食べさせてあげたい。もちろんトマトも。

双子にあこがれて

東所沢・勅使河原　亜矢

ないものねだりだが、双子にあこがれた。自分と同じ顔がもう一人いるなんて、テレビの世界だと面白おかしく扱っているからだ。

しかし今となっては、自分みたいなのがもう一人いると思うと大変だ。まして片方が上出来なら比較されてひねくれていそうだ。

我が家は一人っ子だが、毎日がてんてこまい。双子ならもっと大変だろうが喜びも2倍なんだろう。少子化の時代、「頑張って子育てしてください」と応援したい気持ちでいる。

双子、私たちの場合

東狭山ヶ丘・町田　千恵子

私は双子である。母の胎内から一歩出遅れたので妹分である。子どものころは見分けがつかないと言われていたが、大人になってからの環境とおしゃれ感覚の違いで、今は間違えられることはないと思っている。

小学校時代の恩師には「電話の声と手紙の筆跡がよく似ているので驚いています」と言われている。成績はいつも姉のほうが少しだけ上だったと記憶している。いじめにあってすぐ泣くのは姉、負けずに立ち向かうのは私の役割だったことが思い出される。

私が優位なのは唯一、一緒にウォーキング大会に参加するときだけだったのに、最近病を得てそれはもうできなくなってしまった。

私たちは誰（だれ）にも分からない特別な感情を共有して仲良く生きていくと思う。

次回のテーマは「旅の思い出」です

▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「旅の思い出」▶締め切りは９月７日㈭必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係◎Eメール（アドレスkouhougenkou@city.tokorozawa.saitama.jp）も可。